

十小だより



令和7年度1月号 No. 634

令和8年1月8日発行

武蔵村山市立第十小学校

校長 今井 一馬

【教育目標】

－くすの木のように優しくたくましく－

- ・やる気いっぱい（自分で考える子）
- ・笑顔いっぱい（自分も友達も大切にする子）
- ・力いっぱい（丈夫でたくましい子）

【<http://www.city.musashimurayama.lg.jp/school/mmced10s/>】

「自立」と「探究」のサイクルを回す

校長 今井 一馬

明けましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願いいたします。

さて、新年恒例の箱根駅伝では、青山学院大学が2度目の3連覇を果たし、圧倒的な強さを見せました。その強さの秘密はたくさんありますが、一番に挙げられるのは、監督がすべてを指示するのではなく、学生自らが考え、行動する「自立型」の組織づくりを行っている点にあると言えます。2015年に初優勝してから、10年以上に渡って強さを維持していることを見ると、この「自ら考え、行動する」ことの重要性がよくわかります。

本校でも、「自ら計画して、学ぶ」時間である「個別の時間」を創設して、2年目となります。箱根駅伝と比べることは少々おこがましいですが、小学校6年間の中で「自立型」の児童に成長することは、その後の学びや進路に好影響をもたらす、よりよい人生を送るための礎だと信じています。

2学期には、縦割り班で「個別の時間」を実施し、上級生が下級生に教えたり、下級生が上級生の勉強に興味をもったり、異年齢の化学反応も起こっています。青山学院大学でも先輩・後輩の間で高め合ったり、伝統を引き継いだりしています。第十小学校でも、そんな芽が育ちつつあります。



【縦割り班で行った「個別の時間」の様子】

また、昨年のノーベル賞では、生理学・医学賞に大阪大学特任教授の坂口志文氏が、化学賞に京都大学特別教授の北川進氏が選ばれました。このお二人が、次の世代に向けて話されている中に、次のような言葉があります。

坂口氏「自分で興味があることを大切にすると、新しいものが見えてくる。ずっと続けると気が付いたら面白い境地に達する。」

北川氏「（どんな時も）自分の感性を信じること。（誰もが考えていないことに）チャレンジすること。そして（研究対象に対する）興味が融合して私自身の方向性を変えた。」

A1が日常に溶け込み始め、学び自身も変化の時代を迎えましたが、「興味」「チャレンジ」「続ける」などの言葉は、この時代を生きる指針となります。中央教育審議会の論点整理においても、「好き」を育み「得意」を伸ばすという方向性が示され、子供たちの「好奇心」から「探究」につなげていく授業が目指されます。



【残堀川でのフィールドワークの様子】

この「興味」や「好奇心」は、教室でも生まれますが、外に出て本物に出会（合）った方がたくさん生まれます。子供たちはたくさんフィールドワークに出かけて、自然や人と触れ合っています。そこから生まれる興味や好奇心で、探究のサイクルを回し続けてほしいと願っています。